暮らしのぞき箱

季節を知ったら
暮らしが楽しくなった

〜第三六八号〜

晴明（せいめい）　四月五日

アイナシ

弥生四月。椿（つばき）、木蓮（もくれん）、雪柳、そして桜と、次々に咲く花々。そろそろあの花も咲いたかなと、鈴鹿市の府南寺（ふなんじ）へ出かけました。天然記念物のアイナシを見るためです。昨年は残念ながら花の季節が済んでいました。

バラ科のアイナシは、イヌナシと栽培種の間に生まれた自然交配種で、その果実はほとんど発芽生育しないため、植物上珍しいものとして、県の天然記念物となっています。今年はちょうどいい花の頃に巡り会うことができました。高い幹は十メートル近くある大樹で、純白な花をいっぱいに咲かせています。近くのソメイヨシノの桜も見頃を迎え、薄いピンクの桜と、白い五弁のアイナシの花であたりは春らんまんといった風情でした。お寺のご住職曰く、「今年は若い枝も花を付け、元気がいいです」。というのも、すでに江戸時代には大木だったとお寺には伝わりますが、明治時代中頃に一度伐採され、それ以降は残った幹から、五本ほどの株立ちでここまで大きく育ったと知りました。この清楚な白い花の持つ、強い生命力を感じました。

伊勢にも市の天然記念物になっている「旭町のアイナシ」があります。平成三十年九月の台風の強風で枝が折れ、隣接する建物やフェンスに被害がでたため、再発防止のため一部伐採されました。その後どうなっているのか、市の教育委員会へ問い合わせたところ、「剪定によって樹高は低くなりましたが、アイナシ本体は、すくすくと再び育っています。今年も白い花がもうじきつくと思います」とのことでした。

二十四節気は、万物が清らかで生き生きとした様子を表した「清浄（せいじょう）明潔（めいけつ）」という言葉を略した清明を迎えました。花が咲き、蝶が舞うこの季節を堪能したいものです。

文　千種清美

伊勢内宮前 おかげ横丁

おかげの里便り

おかげ横丁

○『山口誓子俳句館特別展～神宮と山口誓子～』

山口誓子の初参拝は昭和17年12月。その後、戦後初めて行われた第59回神宮式年遷宮に出仕心得奉仕者として奉仕し、御木曳行事や宇治橋の渡始式、御白石持行事など数々の神宮行事に参加しています。
昭和30年代後半からは毎年伊勢志摩のホテルで年を越し、神宮参拝しています。
山口誓子は、なぜ神宮に惹かれていったのか。どのように神宮を参拝したのかを俳句や随筆でご紹介します。
初参拝の様子や神宮行事に参加した姿の展示もいたします。

と　き／4月29日(金・祝)～5月22日(日) 10:00～17:00
ところ／おかげ横丁「山口誓子俳句館」

山口誓子俳句館とは…

伊勢をこよなく愛し、多くの作品に取り上げ、それによって伊勢を再発見した近代俳句の第一人者・山口誓子氏の記念館です。
季語の展示のほか、2階では代表句と写真パネル、誓子揮毫による陶器展示、貴重なインタビュー映像がご覧いただけ、山口誓子氏をより深く知っていただけます。

山口 誓子(やまぐち せいし)1901～1994
京都生まれ。俳人。
本名・新比古(ちかひこ)
東大法学部卒。東大の俳句会で活躍し、「ホトトギス」で高浜虚子に見出され、俳壇に登場する。
昭和23年 俳詩「天狼」を創刊。
昭和・平成の俳壇をリードし、近代俳句の革新に貢献。
句集「凍港」「激浪」「青銅」など。

お問い合わせ／おかげ横丁総合案内「おみやげや」電話0596-23-8838
※新型コロナウイルス感染拡大予防のため、内容の一部または全体を中止する場合があります。

五十鈴塾

○『「朧夜香」を楽しむ』

「照りもせず　曇りもはてぬ　春の夜の　朧月夜に　しくものぞなき」新古今集　大江千里
(さやかに照るのでもなく、といって全く曇ってしまうのでもない、春の夜のおぼろにかすむ月の美しさに及ぶものはない)
春の夜に月がほのかに霞んでいる情景が目に浮かんで、日本人の美的情感のきめ細やかさを感じます。
今回は春の夜に「霞」は真那賀、「花」は羅国、「月」は佐曽羅の香りを聞き、「朧月夜」を楽しみましょう。
香木の種類は7種類、伽羅・羅国・真南蛮・真那賀・佐曽羅・寸門多羅・新伽羅。
産地や最初に渡来した国などから分類したもので、香十徳といって十の徳がもたらされます。
心ときめく香りが誘う空間の中で、心身ともに安らぐ静かなひと時を過ごしてみませんか。
香りで表現された主題を鑑賞し、その世界に遊ぶことが香道の醍醐味なのです。
(筆記用具をお持ちください)

と　き／4月12日(火) 18:30～20:30
講　師／東 堯霞(香道御家流三條西宗家直門師範)
参加費／一般 5,900円　会員 5,400円(香莚料・食事代・お菓子代含む)
場　所／五十鈴塾右王舎

五十鈴茶屋

○『節気菓子』

花筏(はないかだ)
川面に舞った桜が、岸辺に着かず離れず筏のように浮かび、流れにまかせて漂い続ける、古人も詠んだその風景。
粒餡を包んだ求肥に桜の姿をとどめて、花のなごりに思いをこめました。

胡蝶の舞(こちょうまい)
神宮では毎年四月、神恩に感謝を捧げ、国民の平安を祈る、春の神楽祭が行われます。
古式ゆかしく演じられる「胡蝶」の舞の装束を白あんを包んだ羊羹で表現しました。

神宮つづじ(じんぐう)
神宮にもつつじが咲く頃となりました。
山芋あんのきんとんで粒餡を包み、木々の緑と赤いつつじが見せる鮮やかな色彩を表現しました。